

福井県医師会

だより

第687号 平成30年(2018)9月



玉龍雪山の氷河（冰川）

福井市 吉村 信

表紙写真説明：玉龍雪山の氷河（冰川）

福井市 吉村 信

雲南省の世界文化遺産麗江より1時間の玉龍雪山は、ロープウェイで一気に4,506mの冰川公園まで登れる。熱帯であるため4,000m以上まで森林帯があるのには驚いた。その利便性の良さから、頂上駅は人の波で、熱帯にありながら、一瞬にして氷河の世界を楽しめるという観光資源としての価値は無限であると思われた。駅から見上げる4,680mの頂上には雪雲がかかり、万年雪の氷河は南国の太陽に輝いていた。

雲南の 青空を突く 雪の峰

醫 縫 録

治療する眼科から 連携し予防する眼科へ

福井県眼科医会会長 小林 達 治



前任の山岸会長を引き継ぎ、福井県眼科医会会長を拝命しました小林達治です。福井県医師会、各医会の皆様宜しくお願い致します。福井県眼科医会の紹介の前に、現在の眼疾患の現状をお知らせしたいと思います。

各科の現状も同様でしょうが、医療技術の進歩、原因の解明により多くの疾患が治癒する、或いは日常生活に支障が無い程度に完解する様になりました。眼科領域におきましても同様です。その様な現状下で、中途失明者数は約164万人おられます。中途失明の原因疾患としては、1位が緑内障25%、2位が糖尿病網膜症21%、3位が黄斑変性症11%、4位が網膜色素変性症11%です。3位と4位は統計により逆になっている報告がありますが、1位2位は変わっていません。しかも、この2疾患で中途失明の46%を占めている状況です。

この2疾患は、治療に苦慮する事も多い疾患ですが、眼科領域で予防・進行阻止が可能な数少ない疾患でもあります。中途失明の46%がこの様な疾患である事は社会的損失であり見過ごすことはできません。然しながら、視力低下を主訴に眼科を受診された時点で、既に広範囲な視野欠損が存在する進行した緑内障である患者さんや、高血糖を指摘されながら病識が無く放置しており、進行した増殖網膜症で既に手術適応の状態であるのに、「眼科を受診したのは初めて、見えるから心配ないと思っていた」などという患者さんに出会うことも少なくありません。視力低下を自覚しないと眼科を受診しない患者さんも多く居られます。各医会の先生との連携をより密にし、視力低下に至る以前の段階で、治療が開始出来るように努めたい所存であります。

福井県眼科医会は本年度10月28日（日曜日）に福井県自治会館において、一般市民を対象とした「目の健康講座」を開催する予定です。福井大学医学部の稲谷教授と高村准教授にお願いし、緑内障と糖尿病網膜症について講演していただきます。早期発見、啓蒙活動の一環として、各医会の先生からも患者さんにご案内していただけますと幸いに存じます。

もう一つの問題として、小児・学童・生徒の近視率増加、それに付随した不適切なコンタクトレンズ使用があります。近視化は決して疾病ではありませんが、将来の網膜剥離・緑内障・黄斑変性症の危険率増加、不適切コンタクト使用による角膜疾患予防の観点から、今後も近視化予防の啓蒙活動や情報公開に努めたいと思います。

福井県眼科医会は現在82名の会員で構成されています。A会員の先生が37名、B、C会員の先生が45名であり、25名（30%）が女性会員です。県内の各医会においては規模の小さい医会ではないかと思えます。

眼科は診療・治療が、眼球・眼窩周囲に限局される事が多く、それ故各医会の先生と連携が疎であった事も否めません。在宅医療や「かかりつけ医」の重要性も増している現状で、眼科医だから、「全身の事はわからん」という立ち位置にいる訳にはいかないと思います。眼科領域以外の知見を少しでも得ていく様に努めたいと思います。各医会の先生方にご助言を頂く事になるかもしれませんが、宜しくお願い致します。